



歌川廣重 東海道五十三圖會 荒井名ぶつ蒲焼（原画・浜松市美術館蔵）

宿場

新居関所史料館・秋の特別展

その昔旅人をうれしがらせた
うまいもの珍しいものすぐれもの
五十三次宿場名物道中双六

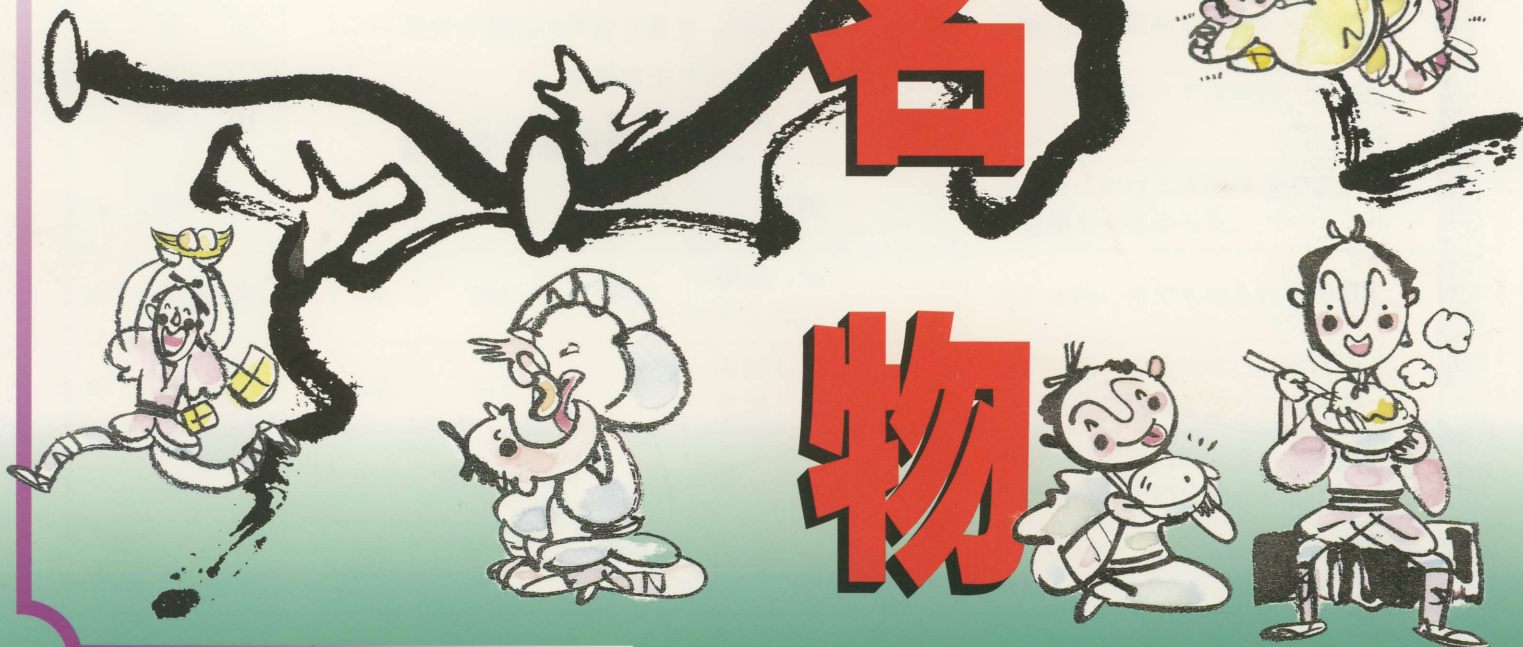


と

名

物

- 平成10年
10月27日(火) ▶ 11月23日(祝)
- 新居関所史料館



特別展「宿場と名物」

開催にあたって

江戸時代の旅といえば、庶民は徒歩に頼るしかありませんでした。現代と違い、旅程の様子を知る情報が乏しかったことも想像にかたくありません。土地の名所・旧跡、名物・名産などについての予備知識も、すぐ手に入るとは限らない旅の案内集や口コミによってしか得ることはできませんでした。そして、いざ旅の途についても、道中では楽よりも苦の方が多かったことと思われます。それだけに、土地の名産や景勝にふれる喜びは、我々とは比べものにならないほど深く大きいものでした。

今回開催する新居関所史料館特別展「宿場と名物」では、東海道五十三次それぞれの宿場自慢をとりあげ、当時の旅人がどんなものを楽しみを見だし、おもしろみを感じたか、また、土地の人が何をもって郷土をPRしたか振り返ります。名物を知ることにより、時は移れど変わることない旅と人情を見ることができるでしょう。

新居関所は平成12年に設置400年、さらに13年には東海道宿駅制度が開設400年を迎えます。一足先に、五十三次宿場名物の道中双六をお楽しみください。

最後に、本展の開催にあたり、貴重な資料の出品を快諾くださいました関係各位にお礼申し上げます。

新居関所史料館

江戸期の宿場と名物

江戸時代における交通制度は、庶民の物見遊山や商用のためではなく、第一に公用交通の便宜のために整備が進められました。慶長6年(1601)から徳川家康が行った五街道の整備や東海道五十三次、中山道六十九次の宿場設定は、幕府公用の人物往来や物資運搬、参勤交代制度の運用を念頭に置いたものでした。

しかし、江戸時代も後半にさしかかる文化・文政期ころになって、経済も発達し、社会が落ち着きを見せはじめると、伊勢参りなど寺社参詣や湯治を中心とした庶民の旅が盛んになりました。団体として参詣旅行をする伊勢講、稻荷講なども各地につくられます。それとともに街道や宿場の整備がさらに進み、宿も自炊制、ただ泊まるだけの木賃宿から一歩進んで、今日の旅館のように食事を提供する旅籠が一般的になりました。旅行ガイドブックである「名所図会」、「旅行用心集」などが刊行されました。

宿場の名物はそうした中で次々と生まれていきます。楽しみといえど何をおいても食べること、これは古今変わりありません。味覚に訴える名物が圧倒的に多かったのは当然といえるでしょう。東海道でことに名高かったのは、「新居の鰻蒲焼」、「丸子のとろろ汁」、「桑名の焼蛤」で、これらは東海道三大名物といわれました。

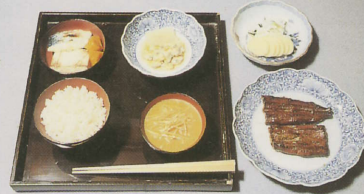
土地に産する素材に独特の料理法や細工を施して、そこでしか得られない味わいと技巧を駆使し、土地そのものを表現しているところが名物の名物たる所以です。食べ物でない名物、小田原の提灯、三島の暦、掛川の葛布、鳴海のしぼりなども、その土地の風土・歴史の中に生まれ出る必然性を持っていたのです。文化7年(1810)に出された「旅行用心集」に、「それぞれに所の風土を味(あじわ)ひてくへは(食えば)悪敷(あしき)ものもけつかう(結構)」とあります。味に多少の難点があっても、土地柄に思いを馳せながら食べれば、これすなわち「うまいもの」であったのです。名物というものに対しほどよい距離を置きながら、それを楽しもうとするゆとりが見えます。

ここに紹介した宿場名物の中には、今は目にすることの珍しいものもあれば、なお名物の名をほしいままにしているものもあります。廃れたと見えても形を変えて残っているものも少なくありません。苦勞の多い、時には単調な旅に趣を添えた名物は、宿場の花ともいえるものでした。大量生産や流通が望めなかった江戸時代においては、それらの多彩さと独自性は旅人の目を見張らせたことでしょう。当時、唯一の情報ルートであった街道を介して、それぞれ味のある宿場文化が伝わっていきました。

東海道五十三



〈新居〉鰻蒲焼



東海道の三大名物

新居

鰻蒲焼

暮れの寒い時期に遠州灘から浜名湖へやってくる稚魚が、湖内で脂ののった鰻に成長する。食べやすく美味の蒲焼きが行われるようになった江戸期以後、鰻といえば浜名湖といわれるほどになった。とくに土用丑の日の前後にスタミナ料理としてもてはやされた。蒲焼き屋が軒を並べていた新居宿の様子が旅行記に記されている。秘伝のタレを用いるといわれた旅籠「紀の国屋弥左衛門」の蒲焼きが街道筋で知られた。関東地方と同じ背開きにしてから白焼きにし、蒸してタレをつけながら焼く。

二次宿場名物



武蔵



丸子

とろろ汁

「梅若葉丸子の宿のとろろ汁」という句を芭蕉が残した。丸子は現在静岡市に含まれる。広重の版画にも描かれた「丁字屋」は現在も営業している。山芋をすりおろし、鰹だしと醤油、卵、白味噌で味をつけて食べる。

桑名

焼蛤

伊勢の海でとれる肉厚の蛤を、殻をつけたまま炭火で焼いて食べる。風味を深めるため、江戸期には火に松かさを入れ、焦げの香りをつけたといわれる。調味材料を加えず、蛤が含む塩味だけで食する吸い物も知られた。

東海道五十三宿

No.	宿 場	人口	家数	本陣数	旅籠数	名 物	そ の 他
1	品 川	6,890	1,561	1	93	芝肴 奈良茶 芝海老	江戸の南の門戸として重要な宿。吉原と並び遊興の里としても知られた。
2	川 崎	2,433	541	2	72	米饅頭 奈良茶飯	川崎大師のお膝元。宿成立は元和9年(1623)。
3	神奈川	5,793	1,341	2	58	亀の甲煎餅 台の茶屋料理	景勝の湊町。幕末に、近くの街道上で「生麦事件」が起きた。
4	保土ヶ谷	2,928	558	1	67	ぼたん餅 焼き餅	権太坂を越えたところにある立場茶屋のぼたん餅が有名であった。
5	戸 塚	2,906	613	2	75		東海道から鎌倉への入口にあたる要衝であった。
6	藤 沢	4,089	919	1	45	ひしこなます さざえ あわび	時宗総本山遊行寺の門前町。江ノ島参詣でもにぎわった。
7	平 塚	2,144	443	1	54		怪談「番町皿屋敷」のお菊の墓が近くにある。
8	大 磯	3,056	676	3	66	鮫鯨料理 花水団子 子 こゆるぎ饅頭	海水浴場近くに当時の松並木が今も残る。
9	小田原	5,404	1,542	4	95	提灯 梅漬 蒲鉾	箱根の坂のぼりを控える。名物の小田原提灯はその山道でも使われた。
10	箱 根	844	197	6	36	山椒魚 甘酒 寄せ木細工	街道随一の難所で、関所が置かれた。湯治場でもあった。
11	三 島	4,048	1,025	2	74	三島暦 亀鶴餅 椿 蒲鉾	三島大社の門前町。一里塚が今も残る。
12	沼 津	5,346	1,234	3	55	鯉節 鮎	城下町。宿の西にある千本松原で知られる。
13	原	1,939	398	1	25	白酒 鰻蒲焼き	多くの宿場に見られた榊形がなく、往還の両側に家が建ち並んだ。
14	吉 原	2,832	653	2	60	白酒 鯉 鰻	二度に及ぶ宿の所替えがあった。田子の浦はこの宿近く。
15	蒲 原	2,480	509	1	42	富士見餅 あわび	広重の浮世絵「雪の蒲原」に描かれた。
16	由 比	713	160	1	32	桜海老 さざえの 壺焼き 与津のり	坂下と並び小規模の宿場。難所で名高い薩埵峠が宿の西に控える。
17	興 津	1,668	316	2	34	万能膏 蕎麦切 蠟燭 貝細工	街道筋でも最も風光明媚の地の一つ。朝鮮通信使ゆかりの清見寺がある。
18	江 尻	6,498	1,340	2	50	追分羊羹 豊心丹 青海苔 羽衣餅	巴川河口に清水湊があった。
51	府 中	14,071	3,673	2	43	安倍川餅 茶 わさび漬 紙子	五十三次中、最大規模を誇った宿場。駿府城の城下町。
20	丸 子	795	211	1	24	とろろ汁 灰吹 盆山	「丁字屋」をはじめ、とろろ汁を食べさせる店が当時10軒以上あった。
21	岡 部	2,322	487	2	27	十団子	難所の一つ「宇津谷峠」が宿の東にある。

名物とあらまし

No.	宿 場	人口	家数	本陣数	旅籠数	名 物	そ の 他
22	藤 枝	4,425	1,061	2	37	染飯 鮫の細工物	家康が死ぬ前、鯉の揚げ物を食べた田中城の城下町。
23	島 田	6,727	1,461	3	48	ぐみ 朝顔蕎麦 朝顔饅頭	「越すに越されぬ大井川」を抱える。川会所が復元整備された。
24	金 谷	4,271	1,004	3	51	子育飴 菜飯田楽	西に子育飴と夜泣き石の小夜の中山、東は大井川が控え難所の一つ。
25	日 坂	750	168	1	33	蕨餅 基石	宿の東に子育飴を売る茶店が数軒あった。
26	掛 川	3,443	960	2	30	葛布 藍鮫 さし足袋 白酒	掛川城の城下町。
27	袋 井	843	195	3	50	遠州風 火縄	宿の開設はやや遅れ元和2年(1616)。
28	見 附	3,935	1,029	2	56	蕎麦切 饅頭	古代には国府、江戸期には幕府の代官所が置かれた。
29	浜 松	5,964	1,622	6	94	鯉鮒料理 長芋	連尺、伝馬、旅籠などの町名に宿場の名残をとどめる。
30	舞 坂	2,475	541	2	28	浜名湖魚料理 鰻	古くは前沢、前坂と呼ばれ浜名湖と遠州灘での漁業が行われた。
31	新 居	3,474	797	3	26	鰻蒲焼き 鯉塩から	今切の渡しを抱え、箱根を上回る規模の関所が置かれた。
32	白須賀	2,074	613	1	27	柏餅 蕎麦切	宝永年間の地震津波で宿場が潮見坂上に移転。
33	二 川	1,468	328	1	38	強飯 柏餅	馬場家本陣が復元された。
34	吉 田	5,277	1,293	2	65	火口 うたて兎餅 甘酒 たばこ	豊川にかかる吉田大橋は別名豊橋と呼ばれ、それが現在の地名となった。
35	御 油	1,298	316	2	62	甘酒饅頭	品川と並んで飯盛女を多く抱え、遊興の宿場であった。
36	赤 坂	1,304	349	3	62	草鞋	御油同様、飯盛女が多かった。
37	藤 川	1,213	302	1	36	麻縄 雲母 網袋	江戸時代を通じて幕府領。家数は多くなかった。
38	岡 崎	6,494	1,565	3	112	八丁味噌	西三河における水陸交通の要所。宿の規模も大きかった。
39	池鯉鮒	1,620	292	1	35	朝顔 酒 芋川麺類	馬や木綿の市でも知られた市場町。
40	鳴 海	3,643	847	1	68	有松しぼり 鳴海しぼり	江戸初期・慶長13年(1608)に始まったとされる鳴海しぼりの産地。
41	宮	10,342	2,924	2	248	きしめん 鯉料理	熱田神宮の門前町。桑名への渡船場、美濃路などとの分岐点として栄えた。
42	桑 名	8,848	2,544	2	120	焼蛤 時雨蛤	宮との間の「海上七里」は今切と並ぶ船渡し。

No.	宿 場	人口	家数	本陣数	旅籠数	名 物	そ の 他
43	四日市	7,114	1,811	2	98	万金丹 日永餅	伊勢参りの通過宿としてにぎわった。
44	石薬師	991	241	3	15	薬師餅	客の大半が休憩用の宿場として利用した。旅籠の数は少ない。
45	庄 野	855	211	1	15	俵の焼飯 もちごめ俵	石薬師同様、農村的色彩の濃い宿場だった。
46	亀 山	1,549	567	1	21	さし櫛 追分蕎麦	伊勢参詣客が通らない宿場のため旅籠の数は少なかった。
47	関	1,942	632	2	42	火縄 関の戸 竹 地藏餅	鈴鹿峠を越えた要所。現在、街並みは「重要伝統的建造物保存地区」指定。
48	坂 下	564	153	3	48	櫛 鮎の鮓 蟹餅	五十三宿中、最も人口の少ない宿場。
49	土 山	1,505	351	2	44	さし櫛 銘酒田村川 飴	江戸期、幕府領として代官の支配下にあった。
50	水 口	2,692	692	1	41	干瓢 藤行李細工	小堀遠州が築いた水口城があった。
51	石 部	1,606	458	2	32	田楽 ところてん	道中薬「和中散」は隠れた名産。
52	草 津	2,351	586	2	72	姥が餅 竹の鞭	中山道との分岐点。姥が餅は浮世絵にも描かれた。
53	大 津	14,892	3,650	2	71	大津絵 算盤 近江鮎 弁慶餅	水運の要衝で、古代から栄えた。瀬田の唐橋は街道中でも知られる名所。

特別展「宿場と名物」出品リスト

■浮世絵版画

〈歌川廣重〉

東海道五拾三次之内 鞠子 (とろろ汁)

東海道五拾三次之内 御油 (客引き)

東海道五拾三次之内 水口 (干瓢)

—以上保永堂版

東海道五十三圖會 荒井 (鰻蒲焼)

—美人東海道

東海道五拾三次 桑名 (焼蛤)

—狂歌入東海道

木曾街道六十九次 下諏訪 (旅籠の食事)

〈一恵斎芳幾〉

東海道中栗毛彌次馬 草津 (姥が餅)

■地図・冊子

東海道名所圖會

東海道道中繪圖

旅行用心集

東海道中膝栗毛

東海道双六

■パネル

東海道五十三次

宿場名物

■名物(現物)

小田原提灯 (小田原)

安倍川餅 (静岡)

染飯 (藤枝)

葛布 (掛川)

八丁味噌 (岡崎)

しぼり (鳴海)

焼蛤 (桑名)

万金丹 (四日市)

姥が餅 (草津)

他